

Clinical Impact and Risk Factors for Skeletal Muscle Loss After Complete Resection of Early Non-small Cell Lung Cancer

高森, 信吉

<https://hdl.handle.net/2324/1931815>

出版情報：九州大学, 2017, 博士（医学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

氏 名：高森 信吉

論 文 名：Clinical Impact and Risk Factors for Skeletal Muscle Loss After
Complete Resection of Early Non-small Cell Lung Cancer

(早期非小細胞肺癌患者の根治的肺切除後に起こる骨格筋量減少の
予測因子と予後に与える影響について)

区 分：甲

論 文 内 容 の 要 旨

【背景】担癌患者において、骨格筋量により診断されるサルコペニアと予後不良の関係が近年報告されている。本研究の目的は、早期非小細胞肺癌患者における、術後骨格筋量減少の臨床的意義を明らかにすることである。

【方法】2005年から2010年間に九州大学病院にて病理病期I期の非小細胞肺癌と診断され、術前および術後(1年)のCT画像が存在し、肺葉切除を受けた患者101名を対象とした。骨格筋量の術後術前比は、術後の第12脊椎レベルの傍脊柱筋面積(cm^2/m^2)を術前のもので除して定義した。カットオフ値を0.9と設定した。

【結果】31名(30.7%)が骨格筋量減少群に分類された。活動度(PS)の低下が、骨格筋量減少群と有意に関係していた($p=0.048$)。骨格筋量減少群は、無病生存期間及び全生存期間が有意に短かった($p<0.001$ 、 $p<0.001$)。骨格筋量減少は、無病生存期間及び全生存期間の独立した予測因子であった($p=0.010$ 、 $p=0.0072$)。骨格筋量減少の独立した予測因子は、活動度低下($\text{PS}\geq 1$)と閉塞性換気障害($\text{FEV1.0}\%<70\%$)であった。

【考察】早期非小細胞肺癌患者において、術後の骨格筋量減少は、術後の予後不良と有意に関係していた。活動度の低下した患者や閉塞性換気障害を有する患者においては、術後の骨格筋量を維持できるように慎重なサポートが必要である。今後の前向き研究により、身体活動や栄養学的介入が術後予後を改善するか明らかになる可能性がある。